

「分析」原稿執筆依頼

平成 8 年 3 月 28 日

森 一久 様

エネルギーレビューセンター編集部
〒107 東京都港区南青山3-13-1
TEL 03-3479-2151
FAX 03-3479-2154

前略「月刊エネルギーレビュー」誌の徹底分析原稿のご執筆を依頼申し上げます。
テーマは、原産会議 でこれは、中村 政雄様の紹介による
ものです。つきましては、下記の要領をお願いいたします。

記

- 1) 原稿字数 6200～6500字 (当社原稿用紙=180字=34～36枚以内)
- 2) 図表・写真3～4点=それぞれに説明をつけて下さい。
- 3) 顔写真=サイズは自由
- 4) 締切日 5 月 15 日
- 5) 送付方法 (下記のいずれかの方法をお願いします)

- ①手書きの原稿の郵送またはFAX
- ②フロッピー (機種および使用ソフト名をつけて下さい。また印字したものも同封して下さい。なお入力 is 通常の横書き、文字数で、また保存形式はテキスト形式をお願いします。)
- ③電子メール

宛 先 NiftyServe BXU02360
E-mail erc@t3.rim.or.jp

6) 備考

- ①一般の人にも理解できるよう、なるべく内容は平易に書かれるようお願いします。
- ②勤務先、職務名は原稿冒頭に記入のこと。
- ③文体は「である、した」調で「です、ます」調は避ける。
- ④本誌は縦書き。しかし、数式、英語表記の人名などは横書きで扱うこともある。
- ⑤単位、原子名などはカタカナ表記を原則とする。ただし繰り返し使う場合は最初だけベクレル (Bq)、ウラン (U) 235とし、以下はBq、U235としてよい。

* 7 月号掲載予定ですが、最終的には編集部で決めさせていただきます。
* なるべくフロッピー、パソコン通信でお送りいただければ幸いに存じます。
* なお別紙の連絡先用紙に原稿料振込先、連絡先をご記入の上にお送り下さい。

エネルギーレビュー
あてはぐ様

← 原産
長領

控

6/24
Fax

ご 連 絡 先

ご執筆者名 森 一久 様

1. 校正の際に必ずご連絡のとれる住所をご記入ください。

住所	①ご自宅	②勤務先	(いずれかを○で囲んでください)
〒105 東京都港区新橋1-1-13 東新ビル 6階			
TEL		FAX	
03-3508-2411 03-3508-7925 (D1)		03-3508-2094	

2. 原稿料 (10%源泉) の振込先をご記入ください。

銀 行 名	支 店 名	種 別	口 座 番 号	名義(フリガナ)
第一勧業銀行	藤沢支店	普通	377 1686213	モリ 一久

3. 源泉税支払のためご自宅の住所、TELをご記入ください。
(1と同じ場合は同上としてください)

住所	TEL
〒251 神奈川県藤沢市鵠沼桜が岡1-5-20	

原子力—今、本音で語るとき— —30回記念原産大会の自己点検—

日本原子力産業会議 副会長

森 一久



1500人近い参加者を集めた30回記念大会

—「逆風」は自ら招いたもの

西欧のある代表的な原子力専門誌は、去る四月の第三〇回原産年次大会の様子を「最大の参加者数、だが原子力側からは寂として声無し」と報じた。後述のように二日目の「市民会合」など、結構本音の議論も戦わされたが、この報道も一面での射っている。

大会の準備に当たった「委員会」は、評論家田原総一郎氏を座長に僅か一〇名、うち原子力側は四人だけで過半は批判ないし中立の立場のメンバーで構成した。その第一回会合で、三〇回記念のこの大会の特色をどこに置くべきか、を論じた。

それは、現在の原子力をめぐる「逆風」は、関係者はマスコミのせいなどに

原子力めぐる不毛の論争には 「文化」の視点が欠如していた

しがちだが、実はその原因の殆どは、原子力側のつくったものではないか、これは何も最近の「もんじゅ」や東海アスファルト固化施設の失態に始まった事ではない。とすれば、その実態を洗いざらい明らかにし、原子力関係者にじっくり聞かせようと言うことになった。

その出し物は、二日目の朝九時から夜八時までの三〇回大会記念シンポジウム「改め原子力開発のあり方を問う」（三幕と一寸劇）であった。

二 田原氏の原子力観とマクナマラ元長官の熱弁

記念シンポジウムの紹介に入る前に、内外の識者による講演と、三つのセッションのハイライトを駆け足で紹介しておこう。

田原総一郎氏は、過去四〇年間の原子力をめぐる論争が実りなきものでありつづけたのは、原子力を包摂するような「文明」が、もし成り立つものなら、それは旧来の、あるいは日本の「文化」とどう



田原総一郎氏

矛盾し、またいかにしてその矛盾を（宗教論争でなく）止揚し

うるものか。そういう「文化」の視点が欠如してきたため、と鋭い分析を展開した。しかし同時に、一部の市民、原子力の推進・反対の中に、このことに微かに気づき始めた兆候を感じとったことが、田原氏が委員長を敢えて引き受けた理由である、と筆者は感じている。

ケネディら三人の米国大統領の元国防長官の重責を担ったR・マクナマラ氏は、過去五〇年の冷戦時代の「平和」というものが、膨大な核爆弾の上の正に「綱渡り」の連続だった事を、臨場感溢れる語りで回顧し、核兵器は人類にとって「危険極まりない、無用の長物」と断じた。そして、核兵器の廃絶と、世界の安全保障の新システムの構築を急ぐべしと熱弁を振るった。

マ氏のようなこの分野で最高ともいえる経験者の口から、熱っぽく核兵器廃絶の緊急性の訴えが聞けたことは、時代の大きな流れを印象づける。

三 科学者は「勇氣」を持って真実を語れ、とフェラン女史

科学と健康全米会議の議長E・フェラン女史は、公衆衛生学の権威。極端な環境論者が間違った誇大な情報を流し、それに常にマスコミが悪のりしてきた。そ

の結果、ただ現代社会の発展を阻害してきたとか、実例を挙げて説明し、このような「つくられた恐怖」がエネルギーや食糧の、忍び寄る「大きなリスク」に対する、社会の「不感症」を醸成していると警鐘を鳴らした。

このようなリスクについての真実を識るはずの科学者の多くが、「世間の評判を恐れて」明らかな間違いに対しても口を閉ざしている事実には強い憂慮を表明、科学者は「己が良心あるなら」勇気をもって発言すべし、と卓を叩いて強烈に訴えた。

低レベル放射線の安全性も当然、彼女の指摘の対象であり、関係学者の間でこの様な「社会的責任」についての論議くらいは、そろそろ始まっていいと痛感する。

四 ハナエ・モリ・ムッシュウー魅力の秘密

午餐会での卓話は、暫し「エネルギー・原子力」を離れ、日本の文化について外国からの参加者（今年二〇〇名）にも興味深いスピーチを聞いて貰おうという趣向。毎度その人選に苦慮するのだが、今回は向坊会長と田原委員長の見解が奇しくも一致、デザイナー（文化勲章受章者）の森英恵氏に依頼した。森氏の「東と西の融合」は、



熱弁を振るうマクナマラ氏

優に本大会の基調講演にもふさわしい風格を備えていた。二〇年前東洋人で初めて閉鎖的なバリ・オートクチュールに加入を認められるまで苦闘、東と西の文化の違いを噛みしめ、その融合の出発点は己のルーツ、アイデンティティの確立なりと達観、「デザイン」のなかで、東と西の融合への道を突き進んでこられた。そして、「二一世紀は科学の世紀、人間の生きざまとのバランスが問われる時代」とし、「これから地球規模で地球人として生きることが大切」と、印象深く締めくくられた。

ハナエ・モリ・ムッシュウーのファンである筆者は、その味わいの奥深さの根源に触れた思いがしたことであった。

五 別れる新エネの評価…廃棄物に横断的思考を

三つのパネル・セッションについて

縦割り行政で解決しない廃棄物 エネ全体を視野に総合的対策を



特別講演の森英恵氏

は、紙面の関係で、それぞれの企画意図とその達成度への筆者なりの評価について、（できるだけ正直に）述べるにとどめよう。

「代替エネルギーの役割と未来」は、エネルギー資源少国日本における原子力の将来の役割の論争で、いつも出てくる基本問題の一つ「新エネでどこまでやれる？」に答えようとしたもの。もっと言えば、太陽エネルギーで三〇%はいけるという少数派と、頑張ってもせいぜい三〇%と言う多数派の、大きな隔たりのポイントはどこにあるか、をハッキリしてみたい、ということにあった。

パネルの基調講演「世界が直面するエネルギー安全保障問題」は元米国エネ省副長官W・マーチン氏、パネル議長の今井隆吉教授等とともに、世界の識者の意見を集約した「脱・二〇一〇年の危機」の著者。二〇一〇年までの世界の経済成長率を低く二%程度とみても、開発途上国を中心にエネ需要は四割は増え、環境上各種の深刻な影響とともに中東への依存増大も避けがたいところ、米国の政治

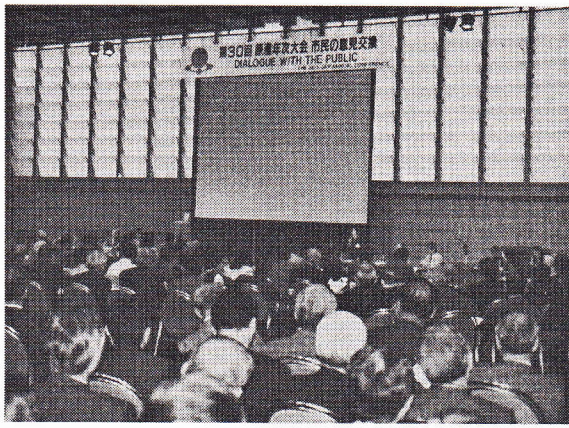
的な安全保障上の役割とともに、日本の原子力の安全な利用は、世界のエネルギーの「集団安全保障」上も重要な意味をもつ、と要約した。

ソフト・エネ論者の藤井石根氏も、国民の意識改革を含め経済成長とエネ需要の悪循環を断ち切る努力の必要と、ソフト・エネの技術開発資金の強化を主張したほか、石炭・石油も廃棄物処理処分の費用負担を明確にすべしと述べたことが注目された。

このように、さすがに専門家が揃えたパネルだっただけに、エネルギーの需要・供給・環境上の深刻な問題のすべてが、網羅的に明らかにされ、そのかぎりでは、パネリストの間で「質的には」意見の大きな食い違いはなかった。このことは確かに立派な成果と言えるが、次には何とか「量的かつ本音の」議論へと展開していきたい。

在来エネルギー（石油・石炭・ガス）と原子力エネルギーとを廃棄物の面で対比すると、前者のSOx・NOxに対応するのが、原子力の場合低レベル放射性廃棄物であり、いずれもある程度不可避免的に発生するものの、燃焼方法の工夫等によって質量と量にかなり軽減できる。これに対し、石炭等の炭素燃焼から発生する炭酸ガスは、原子力（核分裂）に伴う高レベル廃棄物と同じく、いずれも発生エネルギーに完全に正比例して不可避免的に発生するものである。

化石エネルギーの場合、すでに我々現



本音を出し合っの活発な論議にわく市民集会

世代は、前々世代以来燃やし続けた燃料のため、大気中の炭酸ガス濃度が上昇し、いまや「地球環境問題」は南北問題もからみ、人類の直面する最大の難問となっている。

原子力の場合、二つの原爆とビキニの悲劇を経て始まった平和利用では、環境影響と廃棄物では細心の配慮を払って開発が進められてきた。その結果、平和利用では、唯一旧ソ連のチェルノブイル事故を除き、人体・環境への悪影響なしに進められてきたし、最も手ごわい高レベル廃棄物についても処理技術は実用の域にあり、処分についても、多くの国で準備金の積立制度ができ深地下処分の実験に着手している国も少なくない（日本はこの点出遅れているが）。

どんなエネルギーも必ず廃棄物を伴う。にかかわらず各種エネルギーの廃棄物問題を総覧して検討する試みは、日本では殆どなかった。これはやはり、原子力は科技庁、在来エネルギーは通産省という縦割り行政の欠陥の一つと言える。深海慶大教授を議長のパネル「エネルギーの廃棄物にどう対処する？」は、その初めての試みでもあった。

基調講演の英国のG・マーシュ博士はいくつかの国際機関の調査結果を紹介した。たとえば廃棄物処理処分の全コスト（外部コスト）は、石炭・石油の場合、炭酸ガスの影響を除いても、キロワット時あたり一ないし二円、原子力はすべてを含め〇・三円と見積もられている。

原子力の高レベル放射性廃棄物の処分の手順・考え方については、中島篤之助氏から深地下処分だけを追求しないで、たとえば深海底下の深地層への処分などのオプションなども並行して研究する事もっと長く一〇〇年程度取るべしと、ユニークな提案があった。

明確な意見表明こそなかったが、エネルギー全体の廃棄物問題を総合的横断的に考えれば、最も緊急に大きな資金を投じなければならぬのは、全地球的にみて、やはり地球温暖化の元凶らしい炭酸ガスの処理処分対策であろう。原子力の高レベル廃棄物に対しては、将来確実に実行可能な事を見極める研究、最善の方式の選択研究に重点を置くべきである

アジアトム、迷惑施設の背景など 興味をひいた多くの提案や指摘

う。このような視点は、エネルギー全体の廃棄物を総合的に見てはじめてひらけてくるものであろう。

筆者のイマジネーションとして、幾つかの発言や意見から、このような方向へのコンセンサスが生まれる事が期待される。

六 村田講演に意味深長な「眩き」

イマジネーションと言えば、それこそ必要、といえる段階にさしかかっているのは、アジアの原子力協力の体制、いわゆる「アジアトム」についての議論の現状だろう。すでに協力のあり方の議論も久しいというのに、話は堂々めぐり、原子力先進国の全てが首脳外交を展開するなかで、日本のみが国際協力に本格的に乗り出せないことの、まるで「言い訳」探しのための「審議会」などが目立つ。

今回は、この問題に長年携わってこられた、村田浩氏に「私の描く『アジアトム』」と題する基調講演を頼み、関係諸国との議論のきっかけを、というのが、最終パネルの狙いであった。同氏はウラン資源、濃縮、使用済み燃料さらに保障措置等々を、（資金・技術は力ある国が負担するとして）「適当な国で分担する」といったコンテクストをもとに、一

つの試案を提示した。

パネル討論は必ずしもこの構想に集中せず、制限事項や協力希望事項の指摘や表明が多かった。その中で（村田氏の耳に）先進国のパネリストから「日本にもイマジネーションのある人がいたのか」という眩きが聞こえたという。これは、いつも「洞ヶ峠をきめこむ」ばかりの日本に対する皮肉だったのか、やっ和日本も重い腰を上げよう、という「期待」なのか、はたまた「懸念」なのか、その混じり合った気持の表出だったのか、興味深いものがある。

七 聞く人、聞き方により、ヒントが満載

さて本大会の山場だった二日目の「改めて開発のあり方を問う」の要約と総括に入ろう。第一部「原子力はなぜ『迷惑施設』といわれるのか」。議長は鳥井弘之氏（経産省）。基調講演は高木仁三郎氏「原子力施設が嫌われるこれだけの理由」。

無論原子力施設の全部が嫌われているわけではないが、原子力や放射線の潜在危険性というものが市民に警戒される背景となっているとしても、直接の動機は別にある。そのポイントを当の批判の論

客から直接聞こうという、何とも厚かましい企画ではあった。当の高木氏にしても、下手をすれば、「敵に塩を送る」だけに終わりがねないだけに、お仲間の了解など苦労もあつたことと推察する。

そして（少なくとも本大会に限る限り）高木氏が科学者として冷静な批判者の立場を守られたことには、筆者も敬意を表したい。さて同氏の指摘は、①危険性を認めたがらない、②金で片付けようとする、③情報公開に消極的（商業機密に隠れ、難しい言葉で平気）④議論を逃げる、⑤住民の意思を理解しようとせず、⑥唯原発主義、⑦外部意見に頑迷な「原子力仲間」意識の七つに要約した。

これに対し、②に関連し、柏崎商工会議所の内藤信寛氏から、柏崎の場合決して押しつけられたものでなく、地元は国のエネルギー政策に誇りをもって協力しつつ、いろんな制約を乗り越えて地域の発展に結びつけている状況を説明し、「迷惑」している地域ばかりでない事を示した。

同じく立地地域から、小木曾美和子氏は危険情報に揺れる市民の心情を含め基調講演を裏付ける説明とともに、情報公開がなかなかすすきりしない、その背後に役所の干渉ありと鋭く指摘した。

評論家舛添要一氏は、原子力発電への認知度が曖昧にされたまま、過疎地に対して旧態依然たる手法で計画を進めることの限界と弊害を指摘し、端的にいえば「東京湾地域に原発」を真剣に検討することが国民の真面目な議論を引き起こす「妙薬」となるとした。法的には拘束力

もない住民投票などが現実には力を持ち、基地・エネルギー・産業廃棄物等の国家の根幹に係わる問題に、そのつど地元の声に小手先で対応するような事をしていると、日本は「国」の体をなさなくする、憲法改正も視野にいった真剣な取り組みが必要と、危機を訴えた。

技術史家石谷清幹氏のコメントは短時間ながら、技術というものは常に生成発展するもの、「旧守」の好きな日本人も、若者を中心に見事な転換をなし遂げた歴史もある。安全確保についても、以上の権威にすぎない在来の制度はWTOの世界に通用しない等々、示唆に富む話だった。

八 国会のお偉方、三時間「缶詰」の収穫。「エネルギー基本法」等々

昼休みの時間を割いて緊急報告「東海アスファルト火災・爆発」で、動燃から

の陳謝と若干の技術説明があつた後、午後はいよいよ、日頃喧騒に紛れておられる国会の先生方よ、エネルギー・原子力をどんなに考えて下さっているのかと、多くの聴衆が詰めかけた。

議長は田原氏、各党政調会長が顔を揃えた（共産党代表の急病での欠席はちよつと惜しかった）。議長例によつての鋭い切り込みにも、さすが国会のベテランは理路整然と対応され、高速増殖炉の進め方など意見の相違はあるものの、総論賛成・各論反対の風潮が国のエネルギーの根幹を揺るがしつづける事で完全に意見は一致した。

そこまで分かつていて「何故行動しないのか？ 各論や、地域エゴ」に迎合して当選してきた国会の先生方ではしよせん無理なのですか」と詰め寄る田原氏。やはりこんな重要な方々に、エネルギー・原子力の問題を三時間、みっちり論じて貰った意義は大きかった。

特に参加者からの質疑や提案がきつかけとなり、すべてのエネルギーをふくめた「エネルギー基本法」の検討・制定で四者の意見が一致したことは、注目に値する。つまり、国の基本政策に取り組むには「基本法」という橋を「皆で渡る」ほかなし、という本音もまた興味津々のパネルだった。

九 本音の議論のもつ迫力

「市民との」でなく、「市民の意見交換会」と銘打ったのは、今大会の基調

テーマ「いまや本音で語る時」に沿い、すべての立場の人が対等に本音で議論して欲しいと言う願いからだ。夕五時から八時過ぎまで席を立つ人もなく、参加者四五〇名（うちハガキ申込みの一般の一〇〇名、推進・批判の団体推薦の一〇〇名、他は開発側の個人参加という内訳）。

田村和子共同通信論説委員の司会で、申込ハガキに記載された意見や質問を呼び水に自由討論が進められた。学生や若者の発言に、厳しい中に深い知識に基づくものが目立ったこと、それに何といつても、間髪をいれない本音の応酬が出現したのは、大きな収穫であった。

例えば、「原発は上司の了解なしに本場に止められるのか？」という質問に、原発の運転当直長氏「危いと私が判断したら即刻止めます」、田村司会「確認したい。誰か原発の経営管理者、いませんか」。電力会社の支社長氏が手をあげて発言「その通り間違いありません」。こういったオンタイムのやり取りは、普通の講演会やパネルでは見られない、全く新しい生き生きとした討論形式である。

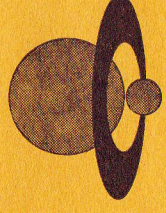
まさに田村氏が総括した通り「もつと意見があつたはず。公開の時代とは、個人が責任ある意見をいい、対応する秋なのです。このような本音で話し合える機会を大切にしたい」

これが、今大会全体の、そして市民集会の評価であり、次回以降への私の期待である。

オンタイムで賛否本音の応酬 通常の講演会では得られぬ収穫

JAPAN ATOMIC INDUSTRIAL FORUM,
- Nippon Genshiryoku Sangyo Kaigi -
1-13, Shimbashi 1-chome, Minato-ku, Tokyo 105, Japan
Telephone: (03) 3508-2411 Fax: (03) 3508-2094
Telex: 226623 JAIFRM J Cable: JATOMFORUM TOKYO

The 25th JAIF Annual Conference



April 8-10, 1992
at PACIFICO, YOKOHAMA

AIR MAIL
PRINTED MATTER



